

月刊 水試ニュース

発行所：愛知県水産試験場（本場）

568号

令和5(2023)年11月

ハマグリ 幼生時代の食欲事情

漁業生産研究所 栽培漁業グループ

当グループでは、ハマグリの資源増大を目指した種苗生産技術の開発を行っています。

ハマグリは、ふ化した後、水中を浮遊する「浮遊期」を経て着底する「着底期」、以後砂に潜って生活する「底生期」という生活史を持っています。種苗生産においては、「着底期」に生残率が低くなるのが技術上の課題となっています。

着底期にはそれまでの浮遊生活から底生生活へ移行するために体の構造も大きく変わる(変態する)時期になり、これまでの試験で浮遊期や底生期に比べ餌を食べなくなることがわかっています(図2)。

このため、餌を与えない方がハマグリの生残に有利になるのではないかと考え、着底期に餌を与えない無給餌期間を設ける試験を行いました。

5日間の無給餌期間を設ける試験区と設けない試験区の、着底期(1回目6日齢、2回目8日齢)から殻長1mm程度(1回目53日齢、2回目51日齢)の着底稚貝になるまでの生残率を比較したところ、無給餌期間を設けた試験区で生残率が高くなり(図3)、着底期における無給餌期間はハマグリの生残率向上に有効であると考えられました。

食欲の秋とはいいますが、皆様も食べ過ぎて体調を崩さないよう、お気を付けください。

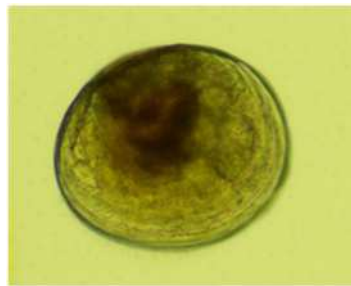


図1 着底期のハマグリ (フルグロウン幼生)

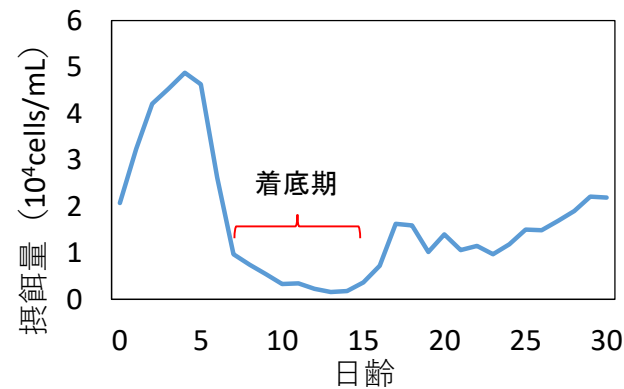


図2 摂餌量の推移

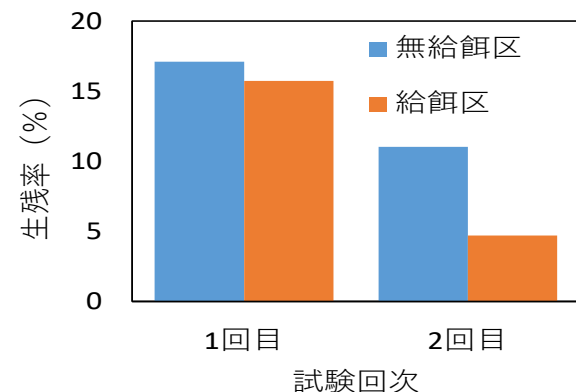


図3 生残率の比較

今年の貧酸素水塊の動向

伊勢湾・三河湾では、夏季を中心に底層に発達する貧酸素水塊(溶存酸素飽和度「DO」30%以下の範囲)による生物の生息・生残への影響が大きな問題となっています。当グループでは定期的に貧酸素水塊の調査を行い、「貧酸素情報」としてウェブサイトで調査結果を発信しています(<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/suisanshiken/0000009720>)。今回は、今年の貧酸素水塊の動向についてまとめました。

伊勢湾では、6月以降、貧酸素水塊が確認され、8月前半にその面積は最大(615km²)となりました。その後、一度は縮小したものの、9月の前半に再び拡大しました。伊勢湾東部のみの観測結果ですが、10月前半には貧酸素水塊は解消しました。

三河湾では、6月中旬より貧酸素水塊が確認され、8月中旬には貧酸素水塊は一度解消しましたが、8月下旬に再発達・拡大し、9月上旬に最大(203km²)となりました。その後、10月中旬には解消しました。

今年の特徴は伊勢湾、三河湾ともに、8月の台風の接近による強風の影響で貧酸素水塊が縮小したことが挙げられます。また、伊勢湾では9月後半に、三河湾では9月上旬から中旬にかけて、貧酸素水塊の面積が平年に比べて大きくなっていました。これは、8月後半から9月までの気温が平年と比べて高く、台風の接近もなかったことから海水の上下混合が起こりにくく、貧酸素水塊が発達しやすい海況であったためと考えられました。

今後も県民の皆様に漁場環境への理解を深めていただけるよう、情報発信を続けていきます。

漁場環境研究部 漁場保全グループ

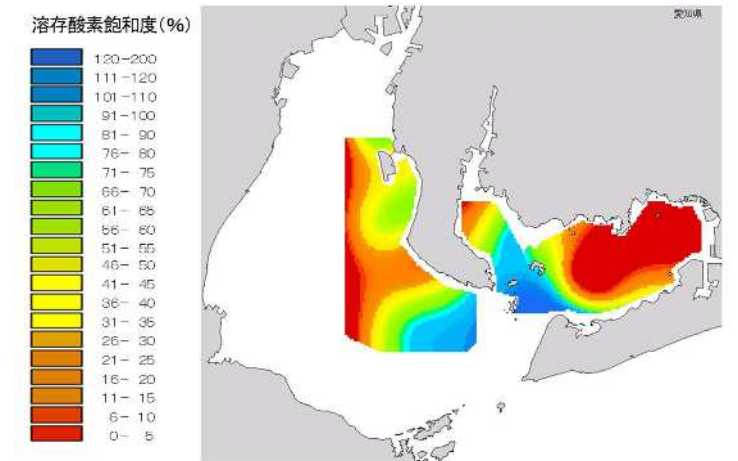


図4 三河湾の貧酸素水塊面積最大時のDO分布図 (9月4、7日調査)

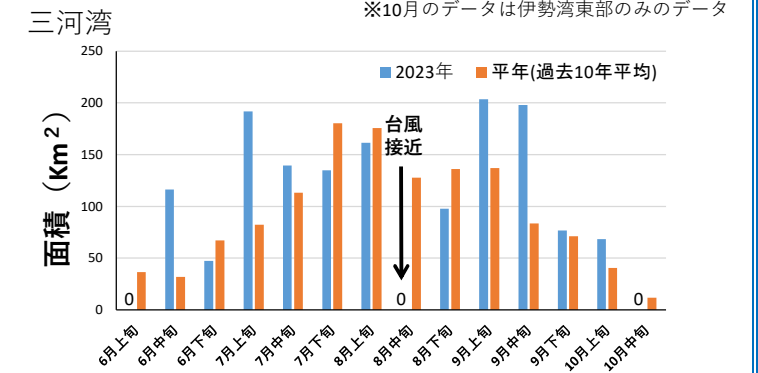
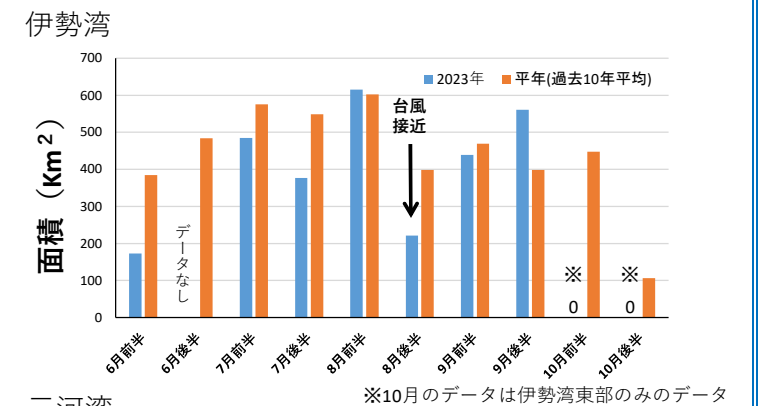


図5 貧酸素水塊の面積の推移 (上：伊勢湾、下：三河湾)

